『無差別』　作・中屋敷法仁

【登場人物】

A　族谷狗吉　（ヤカラヤイヌキチ）
B　族谷狗子　（ヤカラヤイヌコ）
C　族谷人之子　（ヤカラヤヒトノコ）
D　日見不姫神　（ヒミズヒメ）
E　大楠古多万　（オオグスノコダマ）
F　天神様　（テンジンサマ）
G　真徳丸　（シントクマル）

劇場内には、黒い八角形の舞台。
その上には、長さの異なる七本の鉄柱。
中心にある一本を、残りの六本が取り囲む。

演者「G」が姿を現す。
鉄柱の先を仰ぎ、語り始める。

G　さて…
何から、語り始めるか。
そんなことは問題ではない。問題は、
何を語って、終わり、とするかだ。

私は、いつから、私であったのか。
そんなことは問題ではない。問題は、
私が、いつまで、私であるかだ。

ことの始まりは、即ち終わり。
すべてのことは、終わる為にのみ始められる。

私は、私でなくなった後に、何をしているのか。
そんなことは問題ではない。問題は、
問題は…
私は、私である前に、何をしていたのかだ。

すべての演者たち、登場。

G　生業とはそのまま、その者の名と成る。
F　山で木を伐(こ)る者は、キコリ。
B　海で漁(すなど)る者は、スナドリ。
CG　町で商（あきな）う者は、アキンド。
DF　生業を持たぬ者は、名も持てぬ。

ＢＥ　生業の無い者の名など、誰も呼ばないから、である。
Ｇ　ただし、
Ｃ　ただし、
ＣＧ　生業を持ちながら、その名を呼ぶことを忌み嫌われる者もある。
Ｄ　それは、
Ｆ　それは、
ＤＦ　生業そのものが、穢れ多きもの、だからだ。

客席を振り返る「Ａ」。それは「族谷狗吉」である。

Ａ【狗吉】我が一族は罪人（つみびと）の末裔。
その咎（とが）により我が一族は、古より
狗を潰して生きてきた。

ＢＥ　赤犬の頭を大鉈の背で潰しやり、
ＣＧ　目玉と腸（はらわた）を引きずり出し、
ＤＦ　毛皮を肉から、肉を骨から引き剥がす。

「狗吉」、鉈を振り下ろす。辺りに飛び散る犬の血。

Ａ【狗吉】それを食（くら）い、売り渡し、長きに渡り、生き延びてきた。
ＣＧ　この生業を何と呼べよう。
ＤＦ　狗潰し、
ＢＥ　狗殺し、
ＣＧ　狗殺め。
ＤＦ　殺生だ。
ＢＥ　恐ろしい所業だ。
ＣＧ　とてもとても言葉に出せぬ。
ＤＦ　出せぬので、
Ａ【狗吉】我らの一族は、ムラの人間より
名前の頭に「狗」の一字をあてがわれ、

狗と呼ばれ、狗のように扱われてきた。
俺の名は「族谷狗吉」。「狗」とは、即ち「居ぬ」である。
めでたくも縁起のよい「吉」の字も、
頭に科せられた「狗」のせいで、つまりは、「居ぬ吉」。
喜ばしきことのない、不吉の名前と相成った。

他の演者たち、「村人」となり「狗吉」を罵る。

一同【村人】狗。狗。狗。
Ａ【狗吉】お前らだって、赤犬の肉を食うとるじゃろ。
お前らだって罪人（つみびと）じゃ。
ＤＦ【村人】何を言うとるんじゃこのガキは。
ＢＥ【村人】わしらが赤犬を食うは、お前らが可哀そうだからじゃ。
ＣＧ【村人】お前らを憐れみ、厭々ながら、赤犬の肉を買うてやるのじゃ。

「村人」たち、「狗吉」から離れ、

ＤＦ【村人】赤犬の肉は、やわらかく香りよく、飛び上がるほどに旨い…。
ＣＧ【村人】食いたいぞ、
ＤＦ【村人】食いたいぞ。
ＢＥ【村人】祟りは厭じゃ。
ＤＦ【村人】仏罰は恐ろしい。
ＣＧ【村人】やつらにやらせろ。
ＢＥ【村人】族谷にやらせろ。
ＤＦ【村人】どうせやつらは、生まれながらに罪人（つみびと）じゃ。

「村人」たち、「狗吉」を見る。
鉈を振り上げている「狗吉」。

ＣＧ【村人】不殺生の戒を破り、地獄に堕ちるは族谷じゃ。

「狗吉」、再び、鉈を振り下ろす。辺りに飛び散る犬の血。
高らかに笑う「村人」たち。

Ａ【狗吉】罪咎（つみとが）を犯し、ムラ人を肥（こえ）さす。
それこそが俺の生業。つまりは、生きる業…。

集まってくる「狗吉の父母」と「一族の者」たち。

ＣＧ【父母】嘆くでないぞ、狗吉。
Ａ　【狗吉】父上。母上。
ＢＤＥＦ【一族】神も仏も、人間も、我が一族を見放したのじゃ。
ＣＧ　【父母】よいではないか。よいではないか。とらわれを捨て、
ＢＤＥＦ【父母一族】「狗」として生きていこうではないか。

Ａ【狗吉】俺は、「狗」じゃねぇ…「人間」じゃ…。

「狗吉」、虚空に手をかざす。
「狗吉」、手を合わせ、祈ろうとするが、

Ａ【狗吉】…駄目じゃ。赤犬を殺してきた俺の手は、穢（けが）れとる。
手を合わせることも、数珠を握ることも許されぬ。
赤犬を食うてきた、俺の口は、穢（けが）れとる。
念仏も祝詞もつぶやけぬ。
父上。母上。どうして俺に、赤犬を殺させた。
ＣＧ【父母】そうしなきゃ、生きていけないからだよ。
Ａ　【狗吉】どうして俺に赤犬の肉を食わせたんじゃ。
一同【父母一族】そうしなきゃ生きていけないからだよ。
Ａ　【狗吉】物心がついた時にゃ、俺はもう…
神にすがれぬ穢れた体じゃ…。
一同【父母一族】それこそが、お前の生業…生きる業だよ。

Ａ【狗吉】お恨み申し上げるぞ…父上、母上。
我が一族、全てのご先祖、お恨み申し上げるぞ。

突如、歓声がわき起こる。

Ｅ【一族】めでたや、めでたや。女児（おんなご）じゃ。
Ｄ【一族】女児が生まれた。
Ａ【狗吉】…おんなご？
ＣＧ【父母】狗吉、お前に妹が生まれたよ。
Ａ　【狗吉】…いもうと？
ＣＧ【父母】狗子じゃ。
Ａ　【狗吉】…いぬこ？

煙のように霞んでいく「一族の者」たち。
演者「Ｂ」演じる、生まれたばかりの「狗子」の姿。

Ａ【狗吉】いもうと…いぬこ…。
その目はいまだあどけなく、穢れを知らぬ。
柔らかい肌…澄んだ眼（まなこ）…。
生まれたばかりの命とは…こんなにも美しいものなのか…。

ＣＧ　【父母】子を生ませろ。
ＤＥＦ【一族】太らせろ。
一同　【父母・一族】赤犬を食わせて、太らせろ。
Ａ　【狗吉】やめろぉぉぉ…。

「狗吉」、「狗子」を取り上げ、抱きしめると、

Ａ【狗吉】こいつは、俺の妹じゃ。俺が育てる。
父上、母上、乳が離れたら、狗子は俺にくれ。
俺が立派な、狗殺しに育て上げる。

ゆっくりと立ちあがる「狗子」。
幼女へと成長したようだ。
「狗吉」は「狗子」に、赤犬を見せながら、語りかける。

A【狗吉】狗子。お前は人間様じゃ。
赤犬を殺してはいかんぞ。赤犬を食ってはいかんぞ。
これは罪深いことなのじゃ。
どんなにひもじくとも、
人間様としての振る舞いを忘れてはいかんぞ。
ほら、米を買うて来てやったぞ。きれいじゃろう。
父上、母上には見つかるな。お前だけが食うのじゃ。

「狗子」、米を握らせようとする兄を手を振り払い、
赤犬を指さす。

A【狗吉】…この兄の仕事を…手伝うというのか。
ならば狗子、お前は鉈を捨て、ノミを手に取り、
「仏」を彫るんじゃ。

ノミと木槌を持たされた「狗子」。

A【狗吉】「仏」を彫り、祈るんじゃ。

「狗子」、ノミを木にあて、木槌を勢いよく振り下ろす。

A【狗吉】この兄は、どうあがいても地獄行き。
無間地獄で現生の裁きを受けるのがさだめ。
だがな狗子、お前だけは、
お前だけは罪を犯さず、穢れを知らず極楽浄土へ行ってくれ。
それこそが、俺の、生きる業、生業（なりわい）なのじゃ。

仏を彫りながら、「狗子」は少女へと成長する。

B【狗子】私は…言葉を覚えるより先に、ノミで仏を彫ることを覚えた。
兄は赤犬を殺し続け、その金で私に何でも買い与えた。
私が穢れることのないよう、自らすすんで穢れたのだ。

木槌を振り下ろす「狗子」の後方で、
鉈を振り下ろす「狗吉」。
辺りに飛び散る犬の血。それを眺める村人たちに、

A【狗吉】ほら…丸々と太った赤犬の肉じゃぞ。銭を寄越せ。
赤犬の肉を食いたば銭寄越せ。銭じゃ。

「狗子」必死に仏を彫り、兄の声をかき消す。

B【狗子】戦争が激しくなり、父が死に母が死に、
一族の者たちがことごとく死んでいく中にあっても、兄は、
私の為だけに、生き続けてくれました。

「狗吉」と「狗子」、視線が絡む。
兄から顔を背けた「狗子」の肩を「村人」たちが掴む。

CE【村人】国民学校に入学できるのは大日本帝国の子だけじゃ。
DG【村人】狗の子を入れるわけにはいかん。

「狗吉」、立ち去る。「村人」たちには目もくれず、

A【狗吉】大丈夫じゃ狗子。お前は、あいつらとは違う。
お前は、勉強なんぞ、せんでもええ。
ほら、有り難いお経をもろうてきてやったぞ。

お前は、これを書き写すんじゃ。

「狗子」兄から顔を背け、

Ｂ【狗子】私は…経の意味などひとつも、わかりません。
ただただ書き写し、それで功徳が得られましょうか。
…しかし赤犬を殺し、自らの業を生き続ける兄の背中に、
何も言えず、
ただただ、経を書き写し、仏を彫るのでした。

遠くから、歓声。

ＣＤＥＦＧ【村人】大日本帝国、万歳―っ。

Ａ【狗吉】何じゃ、あれは。
Ｂ【狗子】また誰か、戦に行くのでしょう。

「狗吉」、棲家から飛び出し、国旗を振る。

Ｂ【狗子】兄さん…。
Ａ【狗吉】大日本帝国、万歳―っ。天皇陛下、万歳―っ。

「村人」たち、「狗吉」に罵声を浴びせながら、
殴りかかる。羽交い絞めにされる「狗吉」。

ＣＥ【村人】おい、狗。何で貴様のような狗が、日の丸を振っとるんじゃ。
ＤＦ【村人】誰じゃ、こいつに日の丸を持たしたんは？
Ａ　【狗吉】俺が、自分で作ったんじゃ。
指先を噛み切り白布（しろぬの）に、
俺の血でまあるく描いたんじゃ。
お天道様を日の丸を、描いて神軍の勝ち戦、

祈って掲げて、振ったんじゃ。

殴られる「狗吉」。

ＣＥ【村人】狗の血で描いた日の丸を掲げるとは…皇国を貶める行為ぞ。
ＤＦ【村人】狗。お前は、国民でもなければ、非国民でもない。
一同【村人】人に非ずじゃ、狗じゃ狗。

「村人」は「狗吉」に蹴りを浴びせ、立ち去る。
うずくまっている「狗吉」。

Ｂ【狗子】兄は、私を育てながらも尚、
「人間でありたい」というとらわれを
捨て去ることが、できなかったのです。

Ａ【狗吉】どうしたらいいんじゃ。
どうしたら俺は人間様になれるんじゃ。
Ｂ【狗子】兄さん…兄さんは人間ですよ。
Ａ【狗吉】駄目じゃ、俺は畜生以下じゃ。
Ｂ【狗子】兄さん…。
Ａ【狗吉】触るな。触れば狗子、お前の手が穢れてしまう。
触っちゃいかん。
Ｂ【狗子】そんな…あなたは私の兄ではないですか。
Ａ【狗吉】お前のことは、ええんじゃ。
お前はもう、極楽浄土が約束された身じゃ。
しかし俺は、現世にいる束の間の、ほんの僅かでも、
人間様として、生きてみたい…。

Ｂ【狗子】兄を人間扱いしていないのは、他でもない。
兄自身だったのです。

「軍人」たち、やってくる。頭を下げている「狗吉」。

ＤＧ【軍人】…狗の分際で、戦いたいだと？
御国の為に戦って、死にたいだと？
戦って死んで靖国に、英霊として祀られたいだと？

ＣＦ【軍人】黙れ狗。狗の力を借りねばならぬほど、
皇国は落ちぶれておらんぞ。

Ａ【狗吉】お願いでございます。行かせてください。
マニラでもハルピンでも満州でも、どこでもいい。
日本国の兵士として、死なせて下さい。
人間として、死なせて下さい。

ＤＧ【軍人】…狗吉。お前に知恵を与えよう。

Ａ【狗吉】知恵？

ＣＦ【軍人】あのヤマの頂きに鎮座する、
千年は生きたであろう楠の木の、
天高くそびゆる大枝を、伐り取って参れ。

演者「Ｅ」、鉄塔に体を絡ませながら登り、
楠木と変貌していく。

Ａ【狗吉】楠の木の、大枝を伐りとる…。

ＤＧ【軍人】その枝を戦勝祈願の為の香木、護摩木（ごまき）として、
皇国へ献上するのじゃ。

Ａ【狗吉】楠の木の、大枝を伐りとる…。

ＣＦ【軍人】それが叶えば狗のお前、戦に連れて行ってやらんでもない。

「狗子」が駆け入ると、「軍人」たちは消える。

Ｂ【狗子】おやめ下さい。…あの楠木は、ヤマの神。
千年以上もこのヤマを見守ってきた御神木です。
その枝を伐り取るなど…どんな災いが降りかかるか…。

Ａ　【狗吉】どうせ俺は、罪人じゃ。
　　数え切れんくらいの狗を殺してきたんじゃ。
　　祟りなど恐ろしくないわ。
Ｂ　【狗子】兄さん…。
Ａ　【狗吉】俺は、神を殺して人間様になるんじゃ。

Ｂ　【狗子】穢れ多き兄の手で、穢れぬままに生きてきた私、
　　兄の心の真（まこと）の穢れ…
　　拭い去ることはできませんでした。

　　ヤマの獣たちの鳴き声が轟く。
　　大楠木の精霊、大楠古多万が語り出す。

Ｅ　【大楠】土竜（モグラ）たちよ。我に仕える盲（めくら）の一族よ。
　　我の呼びかけに応じ、土の中よりその醜い姿、現せ。

　　地中より現れる「モグラ」たち。

一同【モグラ】お召しじゃ。お召しじゃ。
ＡＢ【モグラ】盲（めしい）な我らをお召しいじゃ。
ＣＧ【モグラ】御主（おんあるじ）、大楠古多万。
ＡＢ【モグラ】如何なる故あって、我らモグラをお召しになるのか。
Ｅ　【大楠】聞いたぞ。聞いたぞ。ついにわしは神の声を聞いたぞ。

　　歓喜の「モグラ」たち。

Ｅ　【大楠】この大楠古多万。楠木としての命を授かり早千年。
　　ヤマに生きる鳥や獣たちを治むる主として、
　　天土（あまつち）に感謝し、生きてまいった。
　　そんなわしのもとに、天神様が御降臨されたのじゃ。

「天神様」、雷鳴とともに姿を現す。

Ｆ【天神様】大楠古多万よ。これよりは
大楠古多万神（おおぐすのこだまのかみ）と名乗るがよい。
高天原におわす神々と共に、このクニを守るのじゃ。

再び雷鳴。「天神様」は大楠木の枝に腰かける。

Ｅ　【大楠】ついにわしは、「カミサマ」になったのじゃ…。
ＣＧ【モグラ】よし、これほどめでたき日には相応しかろう。
ＡＢ【モグラ】ヤマの神様に、我らが頂いた命、お返ししようではないか。
Ｅ　【大楠】命を返す？
ＡＢ【モグラ】連れてまいれ。

連れて来られたのは幼いモグラの「ヒメ」。

ＡＢ【モグラ】これは昨日生まれました、我らの娘でございます。
ＣＧ【モグラ】美しい。美しい娘でございますが、
これをご覧（ごろう）じろ。
Ｅ　【大楠】これは…。
ＡＢ【モグラ】天は二物をお与えになりませぬ。
Ｅ　【大楠】…手が無い。指が無い。爪が無い。
ＣＧ【モグラ】「かたわ」の娘でございます。
Ｅ　【大楠】かたわ？
ＣＧ【モグラ】手が無くては、土は掘れませぬ。
モグラとして生きる価値などありませぬ。
ＡＢ【モグラ】かたわで生き永らえておっても、栓なきこと。
ＣＧ【モグラ】ここはひとつ、
ＡＢ【モグラ】大楠古多万神への捧げ物として娘の命、
お返しいたしたく思います。
ＣＧ【モグラ】穢れぬ体でそのままに、命をお返しできるなど…

娘もさぞ幸せでございましょう。

Ｅ　【大楠】うむ。わかった。娘の命、頂くとしよう。

歓喜の「モグラ」たち。

Ｄ　【ヒメ】…大楠古多万神。

Ｅ　【大楠】お、口が聞けるのか。

ＡＢ【モグラ】我らが美しき娘は「めくら」「かたわ」では御座いますが、
「どもり」「つんぼ」の類にあらず。

ＣＧ【モグラ】さぁさ娘よ。命を頂いてくださるそうだ。
大神様に御礼申し上げるのだ。

Ｄ　【ヒメ】大楠古多万神。私は…死にとうございませぬ。

一同【モグラ】なにっ？

Ｄ　【ヒメ】何故、お返ししなければならぬのでしょうか？
盲のモグラ、手無しのかたわに生まれましたが、
命の価値は皆と同じのはず。
私にも全うさせてくださいませ。
私に、私の命、生きさせてくださいませ。

「大楠」の言葉に「天神様」の声が重なる。

ＥＦ【大楠】命の価値…。そもそも命に価値など無い。
命とは、等しく誰もが手にし、等しく誰もが失うものじゃ。
価値あるは、その限りある命を生きる中で、
何をなしたかじゃ。
美しきモグラの姫君よ。盲の手無しに何ができる。

一同【モグラ】娘や。大神様に命を頂いてもらえ。
それが、父、母、みんなの願いじゃ。

Ｄ　【ヒメ】死にたくない…死にたくない…。

「モグラ」たち、「ヒメ」を殴る。気を失う「ヒメ」。

Ｅ　【大楠】今日はもう休まねばならぬ。
わっしの、根っこの、隅っこに、深く穴掘り閉じ込めよ。
明日の朝には、この大楠古多万神が、娘の命もらい受ける。
明日の朝には、食ってやる。

一同【モグラ】ありがたや。ありがたや。

Ｄ　【ヒメ】死にたくないっ。死にたくないっ。死にたくないっ。死にたくないっ。

「モグラ」たち、「ヒメ」を生き埋めにしてしまう。
土の中で必死にもがく「ヒメ」だが、

Ｄ　【ヒメ】…もがけども、もがけども固い土を掘ることはできぬ。
モグラとして生まれながら、両の手先が無いなどと…。
私の命は何の為に、何をなす為にあるのか。
わからぬ。わからぬぞ我が命。
…しかし何よりわからぬことは、
このような身に生まれてもなお、
「生きたい」と願う私の心じゃ。
何故この期に及んでも、「生きたい」と願うのか。
わからぬ。わからぬぞ我が心。
…祈らねばなるまい。命あるようにと祈らねばなるまい。
しかし、果たして、何に祈れる？
神か？　いや、私の命は神への供物。生贄。捧げ物。
神に祈れようはずがない。…では、どうする。

私は…私の命そのものに祈ろう。
私の命そのものに、かしこみ、かしこみ、祈りを捧げよう。
我が命よ、我が命として、尊くあれ…。

「ヒメ」、激しく、祈る。

一方で「狗吉」、鉈を研ぎながら、語り出す。

A【狗吉】今宵が最後の俺の業。狗を潰すのもこれまでじゃ。
明日の朝には楠木の、天高くそびゆる大枝を、
伐りとり神国日本の、兵士となるのじゃ。
人間となるのじゃ。
今宵が最後の俺の業。これが最後の、狗殺し。

B【狗子】大鉈を研ぎ終えた兄の顔は笑っていた。
穢れ多き生業を前にして、
兄が笑ったのは、初めてだった。

D【ヒメ】死にたくない。死にたくない。

「狗吉」、演者「C」の演じる「母犬」を連れてくる。
舞台後方では、演者「G」が、舞を奏している。

B【狗子】その赤犬は、母親だった。

A【狗吉】腹が大きい。大きいのう。腹の中には何匹も何匹も、
この世に生み落とされるのを待っておる子犬がいるはずじゃ。
殺生はおそろしい。が、これほどおそろしい殺生はあるまい。
いまだ生まれえぬ命もろとも殺すとは…。

「狗吉」、「母犬」を鉈で屠（ほふ）る。

B【狗子】毛皮を肉から、肉を骨から引き剥がす。腹を裂いてみれば、

A【狗吉】やはり子犬じゃ。死んでおる。

「狗吉」、「母犬」の腹から子犬を引きずり出す。

B【狗吉】ひいの、ふうの、みいの、ようの…五匹か。

これは売り物にはならん。食えん。捨ててしまえ。

「狗吉」、子犬を捨て、「母犬」の体を解体する。

Ｂ【狗子】赤犬の体を取り分けながらもなお、兄は笑っていた。
Ａ【狗吉】何をしている狗子。お前は念仏を唱えるんじゃ。
狗の血を浴び、穢れしこの手、
夜明けにゃ楠木、神殺し。

祈り続ける「ヒメ」。

Ｄ【ヒメ】死にたくない。死にたくない。死にたくない。

オスの「モグラ」たち、穴を掘り現れる。

Ｄ【ヒメ】お父様、お兄様方…助けに来てくださったのですか。
Ｇ【モグラ】…なんじゃこの匂いは。
Ｃ【モグラ】なんじゃこのええ匂いは。
Ｂ【モグラ】命の匂いじゃ。
Ａ【モグラ】若い娘の命がわきたつ匂いじゃ。
一同【モグラ】たまらんのう。たまらんのう。

祈る「ヒメ」の臭いに引き寄せられた「モグラ」たち。
「ヒメ」の体をまさぐり始める。

Ｄ【ヒメ】おやめください。おやめください。
一同【モグラ】よいではないか。よいではないか。
Ｄ【ヒメ】舌を噛み切りますぞ。
ＣＧ【モグラ】…舌を噛み切り今死なれては、大神様がお怒りじゃ。
ＡＢ【モグラ】引き下がろう。
ＣＧ【モグラ】土をかぶせろ。

「モグラ」たち、何処かへ行こうとするが、

D　【ヒメ】…お待ちください。
私の真の本心は…
死ぬ前に一度、男に抱かれてみとうございます。

自らの本心を偽り、「ヒメ」は語り続ける。

D　【ヒメ】ただし、その代わり、こちらの「穴」、
少し広げてはくださいませぬか。
命をお返しするまでの仮屋とはいえ、ここはあまりにも狭く
苦しゅうございます。
私と一回、交わるごとに
土壁を一回、御掘りください。
私の「穴」を　広げるついで、
こちらの「穴」を　広げてください。

一同【モグラ】お安い御用じゃ。

土壁を掘りながら、
幼い「ヒメ」の体を弄ぶ「モグラ」たち。

G　【モグラ】ううむ、一度交われば もう止まらぬ。止められぬ。

一同【モグラ】交われ。交われ。掘れや、掘れ。

「モグラ」たち、激しく「ヒメ」を犯す。
土壁は広がり続け、やがて巨大な穴となる。
大楠木の根は大地から離れ、倒れてしまう。
呆然とする「モグラ」たち。

AB【モグラ】塵も積もればなんとやら…。

こんなにも大きい穴を掘ってしまった。
ＣＧ【モグラ】大楠古多万神様を、倒してしまった。
ＡＢ【モグラ】げにおそろしや、オスモグラの情欲。
ＣＧ【モグラ】かたわの娘との交わりに溺れ、神を殺してしまった。

Ｅ【大楠】朝じゃ朝じゃ。お天道様の御恵みを授かる朝じゃ。
さてさて、昨日のかたわの娘、骨も残さず、食ってやろう。
…あれ？なんじゃこれは？
倒れておるぞっ。わし、倒れておるぞーっ。
ＡＢ【モグラ】神なきヤマは恐ろしい。
一同【モグラ】逃げるぞう。逃げるぞう。

雷鳴とともに空中に現れる「天神様」。

Ｆ【天神様】ヤマの主たる大楠古多万神。
それがどうっと倒されるとは。
やい、モグラども。何があった。
一同【モグラ】知りませぬ。我ら盲には何もわかりませぬ
Ｆ【天神様】知らぬわけがあるか。この大穴、
モグラの手により掘られたものじゃ。
一同【モグラ】きーっ。
Ｆ【天神様】ヤマから命を貰い受け、ヤマに育てられし汝らモグラ。
ヤマの神を殺めたるとは、なんたる罰当たり。
モグラとしてのその命、天にお返しせよ。

「天神様」が手を振りかざすと、
「モグラ」の元に雷が降り注ぐ。
次々に倒れていく「モグラ」たち。
「ヒメ」だけが残った。

Ｆ【天神様】おお、まだ一匹、残っておったか。

D　【ヒメ】か、雷様…。
F【天神様】雷様じゃない、天神様じゃ。
D　【ヒメ】私をお助け下さい。
F【天神様】駄目じゃ。
神を殺めしモグラの一族、娘と言えど、生かしておくものか。
D　【ヒメ】これをご覧じろ。
F【天神様】…手が無い。指が無い。爪が無い。
D　【ヒメ】大楠古多万神を倒したるは、たしかにモグラの掘りし穴。
しかし、かたわの私には穴を掘るなどできませぬ。
私は、やっておりませぬ。
F【天神様】たしかに、罪咎無き者に、罰は与えられぬ。
よし、見逃してやろう。
D　【ヒメ】お待ちください。雷様。
F【天神様】雷様じゃない、天神様じゃ。
D　【ヒメ】盲のモグラ、手無しのかたわに生まれましたる私、
一族をみな殺されて、
これからどうやって生きてゆけましょう。
お憐れみを。お憐れみを…。

「ヒメ」、祈る。
その姿は、舞っているかのように美しい。

F【天神様】祈りおったか。
かたわの腕を振り乱し、自らの命、祈りおったな。
「生きたい」と願う、そなたの純粋な命、畏れいった。
盲のモグラのかたわの娘。
日不見姫神（ひみずひめ）と名乗るがよい。
大楠古多万神になり代わり、
このヤマを治める神となるのじゃ。

「ヒメ」、天上高く舞い上がり、天神様と並ぶ。

横たわっている楠木は、それを眺め、

Ｅ【大楠】天神様…天神様…。
ど、どうしてわしの声をお聞きくださらぬのじゃ。
はっ。そうかっ。
わしを神たらしめるは、千年も生きた楠木としての命。
それが途絶えようとしている今…
わしの神としての力も…ホンワカパッパ。

そこへやって来たのは「狗吉」。

Ａ【狗吉】なんじゃこれは。楠木が倒れとる…。
モグラが仰山死んでおる…。
Ｅ【大楠】お前は…狗の一族の末裔じゃな。我を助けよ。
ムラの人間を呼び集め、我を助けよ。
Ａ【狗吉】御神木と言えど倒れてしまえば、ただの木じゃ。
触らぬ神に、祟りなし、
祟らぬ神に、障りなし、じゃ。

「狗吉」、楠木の枝を切り落としてしまう。

Ｅ【大楠】枝がぁー。わしの一番長い大枝がぁー。

「狗吉」に、「日不見姫神」が語りかける。

Ｄ【日不見】人間の男よ。犬の一族の末裔よ。大楠古多万神になり代わり
この「日不見姫神」が新たにヤマの主と相成った。
ムラの人間にこのことを伝えよ。広めよ。
我を崇めよ。我の命を奉れ。

しかし、立ち去る「狗吉」。

Ｅ【日不見】ちょ、ちょっとー。奉れっ。奉れっ。
…何故じゃ。なぜじゃー。
Ｆ【天神様】穢れた者に、神の声は聞こえぬ。
Ｄ【日不見】モグラとしての命を捨て、神の命を授かりし私じゃが、
あぁわからぬぞ、我が命。何をなす為に、いまだあるのか。
Ｅ【大楠】これをご覧か神々よ。あの人間に、天罰を…。
Ｆ【天神様】このような大楠、
いつまでも横たわっておっては邪魔でならぬ。
Ｅ【大楠】えっ…。
Ｆ【天神様】早よう朽ち果てた方がよかろう。

「天神様」、楠木に雷を落とし、消える。

Ｅ【大楠】獣たちに裏切られ…人間には枝切られ…
神にまで体をいたぶられる…。
もはや何も信じぬぞ。神も獣も人間も、もはや何も信じぬぞ。
恨めしいのう。恨めしいのう。

演者「Ｅ」、一旦、役を演じることを辞め、

Ｅ 説明しよう。雷が落ちた木には、茸がたくさん生えるようになるのだ。
天神様の雷を受けた楠木からは、世にも奇ッ怪な、茸が生まれた。

演者「Ｅ」、妖怪「ウラミダケ」となる。

Ｅ【ウラミ】…なんじゃこの体は。茸ではないか。クサビラではないか。
はっ。そうかっ。この世の全てを恨む心が、
我を茸の「もののけ」として転生させたわけだな。
わけだなっ。

恨めしい…恨めしいのう。
恨みに恨んで、ウラミダケ。それこそわが名前。

「ウラミダケ」、あてもなく歩き出す。
「狗子」と「子犬」が現れる。

B【狗子】兄が殺した赤犬の、腹から引きずり出された五匹の子犬。
そのうちの一匹に、まだ息がある。
生きている。
兄が犯した最後の業。赤犬殺しから免れた命…。
私は、穢れるわけにはまいりません。
兄の業を負うわけにはまいりません。
私は、子犬を助けた。その小さい体を洗った。

C【子犬】あぁ…。

B【狗子】熱い。熱い。これが命か。
どうやら雌犬…。生まれたばかりの命というに、すでに、
新たな命を生む業を負うておる。

C【子犬】あぁ…。

B【狗子】お前の母の命を奪った業。それは私の兄が負う。
お前の命を助けた業、それは私が負おう。
狗殺しの家に生まれ、狗を育てる羽目になるとは…。
これも、御仏の御導き…。

「狗吉」、楠木の枝を持ち、帰って来た。

A【狗吉】狗子。見ろ。大楠木の枝じゃ。これで俺は人間様じゃ。

「子犬」を見つけると、

A【狗吉】…我ら人間様が助けた命なら、こやつは狗の子にあらず。
人之子じゃ。人之子じゃ。

どこからともなく、声が聞こえてくる。

ＤＥＦＧ　大日本帝国、万歳ーっ。

Ａ【狗吉】背負うた。背負うた。日の丸を背負うたぞ。
これで俺も人間様じゃ。

ＤＥＦＧ　大日本帝国、万歳ーっ。

Ａ【狗吉】狗子。この兄がいなくなっても、穢れるでないぞ。
穢れるでないぞ。

ＤＥＦＧ　大日本帝国、万歳ーっ。天皇陛下、万歳ーっ。

激しい空襲の音とともに、「狗吉」の姿は消える。

Ｂ　【狗子】戦に行く兄を見送った夜、私の股からは、初めて
血が流れ出した。

「人之子」となった子犬が、語りだす。

Ｃ【人之子】私は母さんが大好きだった。母さんこそ、私のすべてだった。
母さんの幸いのためなら、私はどんなことでもする。

仏を彫っている「狗子」。それを見つめる「人之子」。

Ｂ　【狗子】この母の仕事を手伝うというの、人之子。
あなたは、何もしなくていいのよ。

Ｃ【人之子】母さんがノミで仏を彫る姿を見て、私もそれを覚えた。
これなら、私にもできる。
母さん。ノミを貸してください。

「人之子」、「狗子」からノミを奪おうとする。

B　【狗子】人之子、あなたも仏を彫ろうというの。
…あなたには無理よ。
犬畜生に、御仏の心はわかりません。
C【人之子】犬畜生…？
B　【狗子】あなたは狗よ。メス狗なの。
C【人之子】メス狗…？

「人之子」、鏡に映る自分の姿を見て、驚愕する。

C【人之子】鋭いキバ…固いヒゲ…全身を覆う赤い毛…シッポ…。
私は、犬だったのか…。

犬の遠吠えが聞こえる。

C【人之子】私は母さんの子になりたかった。
人の言葉を学んだ。いろはにほへとの、ひいふうみい。
母さんの語る言葉、書き写す文字、その全てを理解できる。
…しかし、学べども学べども、私の口、犬の口から
人間の言葉を発することはできなかった。

地鳴り。「狗子」と「人之子」の上に、
「日不見姫神」が姿を現す。

D【日不見】人間の女と、雌の犬。
B　【狗子】この声は…？
D【日不見】私の声が聞こえるのか。
B　【狗子】聞こえます。聞こえます。
D【日不見】よっしゃー。我が名は「日不見姫神」。
盲のモグラのかたわの姫じゃ。
私が私のこの命、尊くあれと祈った顛末。
オスモグラどもの情欲を、駆り立ててこの大穴を、

掘らせて倒した大楠木。
神を殺したこの私、新たにヤマの神と相成った。
お前の兄は息災か。

B　【狗子】…はい。戦に行きました。

D【日不見】感謝せよ。
楠木の大枝を伐り取り、無事なるは、
この私が、楠木を殺したからじゃ、あらかじめ。
さぁ、女。我を祀れ。我を崇めよ。我の命を奉れ。

B　【狗子】お断りします。

D【日不見】は？

B　【狗子】山の神を殺したというあなたの命なぞ、祈れませぬ。

D【日不見】いやいや、だってあの人ね、私を食おうとしたのじゃぞ。
命を奪おうとするものの、命を奪って何が悪い。

B　【狗子】あなたは神の生贄だったのですか…。

D【日不見】そうよ。

B　【狗子】ならば、あなたの命は神に捧げるべきもの、
神を殺し神になるなど言語道断。

D【日不見】きーっ。

「日不見姫神」が怒ると、地鳴りが起きる。

D【日不見】…まぁ、今に見ておれ。やがてイヤでもこの姫を
神と崇めねばならんようになるぞ。
聞け。

B　【狗子】…聞く。

D【日不見】ヤマの岩場に気をつけよ。ヤマの岩場に気をつけよ。

B　【狗子】同じことを…二回言った？

「村人」たち、ヤマの岩場に立ち入ろうとする。

B　【狗子】皆さん。山の岩場に行ってはなりません。

山の岩場に行ってはなりません。
あそこに踏み入ればヤマの神の怒りに触れます。
D　【日不見】きーっ。

「日不見姫神」、地鳴りを起こす。
岩場が崩れ、怪我を負った村人たち。

一同【村人】ヤマの神がお怒りじゃ。ヤマの神がお怒りじゃ。
D【日不見】見たか。これこそわが力。
B　【狗子】皆さん…大楠木は倒れ、山には新たな神がいらっしゃいます。
AG【村人】狗の一族の末裔ながら、穢れぬように育てられたという狗子。
EF【村人】お前、神の声が聞こえるのか。
B　【狗子】はい…。
AG【村人】ならば狗子、お前を神のミコとミコんで、
神のミココロをわしらに伝えろ。韻踏めてる…。
B　【狗子】新たな神は「我を祀れ」とおっしゃっています。
D　【日不見】何かせよ。私を神と崇める、何らかをせよ。
B　【狗子】「何らか」をせよ、とおっしゃっています。
AG【村人】舞いじゃ。
EF【村人】神楽じゃ。
一同【村人】御神楽舞（おかぐらまい）じゃ。
D【日不見】オカグラマイ？
B　【狗子】神に捧げる、舞のことです。
D【日不見】よかろう。その御神楽舞とやら、舞うがいい。
一同【村人】新たな神の為に舞い踊れ。

「村人」たち、御神楽舞を奏する。
しかし、

D【日不見】やめろー。

「村人」たち、地鳴りで吹っ飛ぶ。

D【日不見】なんじゃその舞は。
B　【狗子】あなた…盲のモグラなのに舞が見えるの？
D【日不見】見えぬわ。見えぬが感じるわ。
　心のこもらぬ形だけの儀式。なんじゃこの舞はー。
EG【村人】この御神楽は、ムラに古くより伝わる舞。
B　【狗子】かつて大楠古多万に捧げられたこともある。
D【日不見】きー（地鳴り）。
　そんな使い古された神楽で、新たな神であるこの私、
　満足すると思うたか。
　伝わらんぞ。崇め、敬い、奉る心、伝わらんぞ。
　狗子。私の御神楽舞。唯一無二の御神楽舞。
　舞うのじゃ。
　盲のモグラの神楽。…韻、踏めてる。

B【狗子】このムラの人間では…無理。
　いずこより舞方（まいかた）を連れてこなければ。
AEFG【村人】しかし、こんな山奥に、来てくださる舞方があるか。
C【人之子】私が連れてきましょう。
　母さん、私に行かせてくださーい。
AEFG【村人】わんわん。きゃんきゃん。やかましい。
B【狗子】人之子…あなたが呼んでこようと言うの。あなたには…無理。
　たしかに、あなたには人の言葉を解する力がある。
　しかし、あなたの言葉は、人間にはわからないのよ。

「人之子」、引き下がらない。

B　【狗子】…ならば、この手紙をもっていきなさい。
　こんな山奥にお出ましくださる、舞方様を探してくるのです。
C【人之子】母さんから役目をもらったのはこれが初めて。

命を賭けて、舞い方様をお連れしよう。

「人之子」、ムラを飛び出すと「ウラミダケ」と出くわす。

C【人之子】あ、茸が生えてる。いただきまーす。
E【ウラミ】ウラミダケ。
C【人之子】もののけだー。茸の、もののけだー。

E【ウラミ】いかにも我はもののけじゃ。
かつては大楠古多万と呼ばれ、
ヤマの神たる楠木じゃったが
我を殺めし者たちを、恨む心が茸に宿り、
今はもののけ、ウラミダケ。
赤犬よ。雌赤犬よ。誰か為に走り先を急ぐ。

C【人之子】そんなの知れたこと、母さんだ。
母さんからの御役目を無事に果たして帰る為。
E【ウラミ】赤犬よ。雌赤犬よ。あの女は、お前の母ではないぞ。
C【人之子】…そんなのもちろんわかってる。
育ての親だろうが母さんは母さんだ。

E【ウラミ】育ての親どころか…あの女はお前の仇じゃぞ。
C【人之子】えっ…。
E【ウラミ】お前の本当の母親は、あの女の兄に殺されたのじゃ。
C【人之子】えええっ…。
E【ウラミ】死んだ母より、引きずり出された5匹の子犬のうち1匹。
奇跡的に生き残ったのが雌犬お前じゃ。どーん（！）。
お前は、母や兄弟の仇を、母と慕っているのじゃぞ
C【人之子】な、なんてこと…。

E【ウラミ】さぁ、兄弟たちの恨みの声を聞け。

ＡＤＦＧ【犬兄弟】妹よー。お姉ちゃーん
Ｃ【人之子】ああ、赤犬の兄弟たちー。

Ｅ【ウラミ】さぁ、恨もうぞ。恨もうぞ。ともに人間を恨もうぞ。
人間が祀りし神をも恨もうぞ。一切合切を恨もうぞ。
とりあえず、その手紙をこちらに渡せ。破り捨ててやる。

Ｃ【人之子】いや…それでも、母さんは、母さんだ。
あの人は、私の母さんだー。
ＡＤＦＧ【犬兄弟】妹…。お姉ちゃん…。
Ｅ【ウラミ】「命の理」に背き「心の理」に従うつもりか。
Ｃ【人之子】恨む心で現世に留まるお前こそ、
「命の理」に背く者。どーん（！）。
Ｅ【ウラミ】うぬぬぬぬ。あの女に味方するならば容赦はせん。覚悟ー。
（すぐやられる）はいー。所詮、茸ー。
おっきいだけが取り柄の茸ー（絶命）。

Ｃ【人之子】私は、私の心に従い生きるのだ。
犬であろうが、人であろうが、母さんの為に生きるのだ。

Ｅ【ウラミ】私の体から胞子が飛び散り、ここに着床すっくすく。
何度でも蘇るウラミダケ。

突如、空間が変わる。演者たちが、水のように揺らめく。

Ｇ【真徳丸】私は、いつから、ここにいるのだろうか。
私は、いつから、私であるのだろうか。「答え」は出ない。
出ない答えを問い続けることが、即ち、私がここにある証。

ＡＢＣＤＥＦ　「真徳丸」
Ｇ【真徳丸】私をそう呼んだのは、誰だったのか。

ＡＢＣＤＥＦ　「真徳丸」
Ｇ【真徳丸】どうやらそれが私の名前。

Ｇ【真徳丸】私の目は、開いていない。
私が出来ることは、生きることだけだった。
私は生きた。私の命を燃やした。

ＡＢＣＤＥＦ　「美しい舞じゃ」
Ｇ【真徳丸】私には生きることしか出来ない。

ＡＢＣＤＥＦ　「ありがたい。ありがたい」
Ｇ【真徳丸】これは…なんだ。

ＡＣ　「米じゃ」
ＤＥ　「木の実じゃ」
ＢＦ　「魚じゃ」
Ｇ【真徳丸】私ではない命か。

Ｇ【真徳丸】私は「命」を食べることでのみ
私の「命」をつなぐことができた。
生きれば生きるほどに、舞えば舞うほどに、
私の周りには「命」が捧げられた。
これを私にくださるのは、誰じゃ。
他の命に生かされている、私の命。
「ありがたい。ありがたい」
これが私の生きる業。
私の生業は、生きること。

そこへ現れる「人之子」

Ｃ【人之子】あなたが真徳丸様ですね。

G【真徳丸】どなたですか。
C【人之子】私は族谷人之子と申す者。
真徳丸様、私のムラに来てください。
ヤマの神に、舞いを捧げてほしいのです。
ムラに来てくださーい。
G【真徳丸】わんわん。きゃんきゃん。
あなたの言葉は、私にはわからない。
C【人之子】あ、そうか…。では、この手紙をお読みください。
子細はここに書いてあります。
読んでくださーい。
G【真徳丸】私の目は開いていない。これは読めない。
C【人之子】しまった。かくなる上は、力づくでムラにお連れするまで。
G【真徳丸】おやめなさい。私を動かせるのは、私だけです。
C【人之子】あぁ…どうしよう。どうしたらいいんだー…。
G【真徳丸】よし、あなたの命、感じ取りましょう。踊りましょう。
C【人之子】はい？
G【真徳丸】舞いましょう。
C【人之子】舞う？いやいや、私は、舞など舞えません。
G【真徳丸】舞を舞えないものはいません。
命あるものは、誰だって、その命を燃やすことができます。
それを舞いと呼ぶのです。
さぁ、さぁ、さぁさぁさぁ、
あなたの舞いを舞わせてください。
C【人之子】真徳丸様ー。ムラに来てくださーい。ムラに来てくださーい。
G【真徳丸】舞えない。それは、あなたの舞ではない。
あなたの舞いを舞わせてください。
C【人之子】私の舞い…。

G【真徳丸】あなたの真の舞いを舞わせてください。

C【人之子】私は、私は、母さんに…愛されたいのです…。
わたしを大切に育ててくれた母さん…。
母さんの幸いの為なら何だってします…。
お母さーん。お母さーん。
母さん。私は犬です。あなたの娘ではありません。
ですが母さん、私は、いつも願うのです。
あなたのおっぱいを飲みたいと、
おっぱいを飲みたいと願うのです。
人間の乳が飲みたいのではありません。
あなたのおっぱいが飲みたいのです。
あなたの命が飲みたいのです。

それを聞きながら舞っていた「真徳丸」。舞い終える。

G【真徳丸】あなたの真の舞い、舞わせていただきました。
わたしの命が、あなたに従えと言っている。
ついて行きましょう。

場面はムラへ。

B　【狗子】あなたが真徳丸様ですね。私は族谷狗子と申す者。
G【真徳丸】なるほど…私はこのヤマの、神の為に舞うのですね。
B　【狗子】なぜそれを。
G【真徳丸】言葉など要らない。
命に直に問うたなら命がそのまま答えてくれる。
なるほど、あ、なるほど、
ここには舞うべき命が、讃えるべき命がある。
B　【狗子】日不見姫神…ヤマの神はそう呼ばれております。
G【真徳丸】日不見姫神…あなたの命、舞わせて頂きましょう。

「日不見姫神」の為に舞う演者たち。

D【日不見】きーっ。うれしいー。うれしいー。
B　【狗子】あなた…盲のモグラなのに、舞が見えるの？
D【日不見】見えぬわ。見えぬが感じるわ。
わたしを、崇め、敬い、奉る心。
私の命を、喜んでくれるのか。
かたわとして生まれた私の命。
祈ってくれる者は誰もなかった。
だから私は私で祈った。我が命よ。
我が命として尊くあれ、と。

G【真徳丸】あなたは祈る必要など無い。
あなたの命は何もせずとも、光り輝く尊きもの。
祈るならば、私が祈りましょう。

D【日不見】きーっ。
B　【狗子】…よかった。よかった。喜んでおいでです。

D【日不見】よし、狗子。こやつをムラに住まわせよ。
毎日毎日、私の為に舞わせるのじゃ。
B　【狗子】真徳丸様をムラに留めおけ、と言っております。

EF【村人】ええっ…。しかし、こんな盲者（めくらもの）、
ムラに置いておくわけには。
D【日不見】え、盲？　あなたも盲なの？　奇遇ねー私もなんですよー。
G【真徳丸】私は行かなくてはいけない。
私が舞うべき命、讃えるべき命は、この世のすべての命です。
あなたの舞は舞い終えました。

D【日不見】いやじゃー。まだまだ舞って欲しいー。
ずっと舞って欲しいー。
B【狗子】日不見姫神…。
D【日不見】こやつを大穴に閉じ込めよ。閉じ込めよー。

大穴の中で舞う「真徳丸」。

D【日不見】美しい…。美しいぞ…。
G【真徳丸】舞が美しいのではない。
私が舞うのはあなたの命。
この舞が美しいのなら、美しいのは、あなた…。
D【日不見】さぁ、食べてくれ。ヤマの獣たちじゃ。
G【真徳丸】要りません。私はすでに、命をいただいております。
神としてのあなたの命です。
D【日不見】…どういうことじゃ？

そこに「天神様」が姿を現す。

F【天神様】ヤマの主たる役目を怠り、何をしている日不見姫神。
大穴に、盲の舞い方を囲うとは…盲と盲、似合いではないか。
D【日不見】似合いとか言うなー。そういう関係ではないー（照）。
F【天神様】ん？　貴様…私の姿が見えておるな…。
G【真徳丸】さぁ。
D【日不見】え？　盲じゃないの？
G【真徳丸】私の目は開いていない。現世にあるものは見えない…
しかし、現世にないものは見える。
すなわち私には、神が見える。
D【日不見】な、ならば、真徳丸。
お前には、私の姿も見えるということかっ…。
G【真徳丸】いや、あなたの姿は…さぁ。
D【日不見】見えないのぉー？　どうしてじゃー？

F【天神様】日不見姫神。さてはお前、この男に恋をしているな。
D【日不見】ば、馬鹿な…。私はかたわのモグラ。恋などするわけがない。
F【天神様】…そのココロは？
D【日不見】手無しの私は…「ほれない」。
G【真徳丸】ウマいこと言えてる…。
F【天神様】しかし、この男真徳丸に、姿が見えぬのが何よりの証。
お前を神たらしめるは、自らの命を祈った心。
真徳丸にその役目、ゆだねし今のお前には、
神としての力は、こっからこーんな感じ（？）。
D【日不見】そうなのー。
F【天神様】神として居続けたくば、その男を遠ざけよ。
D【日不見】それはいやじゃ。
F【天神様】ならば手無しのモグラに戻り、本来の命、
獣としての命を全うしたらどうだ。
D【日不見】それもいやじゃ。
F【天神様】日不見姫神。
何を隠そうこの天神様も、かつては一人の人間であった。
D【日不見】急に語り出した。
F【天神様】栄華を極めし都人であったが、我を妬みし者どもの、
罠に嵌められ都を追われ、西の彼方で命を終えた。はぁ。
しかし、人を恨み世を恨み、恨む心がこの我を
怨霊として現世に留め、都に雷を落とした。
我を畏れた人々は、国中に見事な天満宮、
立ててこの我を神とした。
神となったわしは、神となってしまったわしは
人としてはもう成仏できぬのだ。
人を恨むという恥ずべき心。
それを神と祀られた、私の苦しみがわかるか。
何として、その命を終えるか、
それを選べることは、幸せなことじゃ。

D【日不見】美しき舞…。美しき我が命…。

「ウラミダケ」が語り出す。

E【ウラミ】恨みに恨んでウラミダケ。
諸人讃えし天神様も、元を明かせば祟り神。
諸行無常の世において、唯一変わらぬは、恨む心よ。
恨もうぞ。恨もうぞ。一切合切恨もうぞ。

突如、轟音が鳴り響く。
虚空を見上げる一同。

F【天神様】な、なんじゃ。これは…。
E【ウラミ】キノコじゃ。大きなキノコがすっくすく。
F【天神様】キノコではない、キノコの雲じゃ。
E【ウラミ】いや、キノコじゃ。大きなキノコがすっくすく。
恨みに恨むわしの心が、キノコの神様を呼びだしたのじゃー。
F【天神様】神か、なるほど、この力…。
人が創りしものではないな。

「天神様」はキノコの雲に語りかける。

F【天神様】我は天神様じゃ。天津神・国津神の命（みこと）もちて、
この地に現れ出でた。そなたはこの地を治むる新たな神か。

禍々しい気を浴び、苦しみ出す「天神様」。

F【天神様】この気配、神ではない…。

E【ウラミ】いや、神じゃ。神の気じゃ。
新たな世を創る、神の気じゃ。

F【天神様】くさびらめ、黙りおれ。
　　もののけ風情が、神に神を説くでない
E【ウラミ】この大地には「命」の気配がまるでない。
　　神、人、獣、あらゆる命がキノコの力で消し飛びおった。
F【天神様】真徳丸…。見えているのか？　そなた、見えておるのか？

「真徳丸」は虚空を眺めている、そこに…。

F【天神様】これは、雨か…。
E【ウラミ】いや、違う。
F【天神様】黒い雨じゃ。
E【ウラミ】これは恵みの雨ではないぞ。
G【真徳丸】しかし、呪いの雨ではない。
　　人・神・獣の差別なく、ただただ傷つけ、命奪う雨。
F【天神様】真徳丸よ。人に見えるものが見えず、
　　人に見えぬものが見えるという貴様に、
　　この天神様が問うてやる。
　　あれは神か。神ならざるものか。
G【真徳丸】あれが神か、神でないのか、それを決めるのは私ではない。
　　ただ、やつの前では神も獣も人間も、等しく、無力だ。
　　そして私は、私の命は、やつの為には舞えない。

　　その空間は静かに、暗くなっていく。
　　やがて「狗吉」の姿が浮かび上がる。

A【狗吉】恥ずかしながら帰って参りました。
　　が、恥を知るのはお前らじゃ。
　　なんじゃったんじゃ。この戦は。
　　負けて降参した途端、天皇陛下は国民となった。
　　神が人となるとはどういうことじゃ。

ＤＥＦＧ　「すべて国民は、法の下に平等であつて、
人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、
政治的、経済的又は社会的関係において、
差別されない。」

Ａ【狗吉】これが憲法。俺も国民になれたわけか。
負け戦さまさまじゃ。ありがたいわ。
（周囲を見回し）…肉を食ろうておるわ。
どいつもこいつも罰当たりめが。
そうか…神が人になるような時代じゃ。
神や仏などおそろしくないのじゃな。
神が人になった今…俺たちは何を畏れ、敬えばいいのじゃ。

演者「Ｅ」がつぶやく。

Ｅ　キノコじゃ。
Ａ【狗吉】キノコ…？

「狗子」が現れる。

Ｂ【狗子】生きて、帰って来たのですね。
Ａ【狗吉】あぁ、狗子。俺は人間様として死のうと思うたが、
俺の命がそうはさせてくれんかった。
海の向こうのヤマの中、幾千の敵に囲まれて
もはやこれまで、万事休すと、覚悟を決めし仲間たち。
靖国で会おうと誓い合い、握りしめたる手りゅう弾。
天皇陛下万々歳、金具に指を絡ませる…。
俺は、死ねんかった。手りゅう弾を彼方へ放り投げ、
泥水の中を這いずりまわり、狗のように逃げてきた。
俺は、人であろうが狗であろうが、

生きたいと願ってしまったのじゃ。

B【狗吉】兄さんはまだこの国で
やるべきことがあるのでしょう。

A【狗吉】狗子…。なんじゃこの体は…。

「狗子」の言葉に、「ウラミダケ」の声が重なる。

BE【狗子】キノコの力を浴びてしまいました。

A【狗吉】キノコじゃと…。

BE【狗子】あの日、街に降りたのです。
空が光りました。大きなキノコが現れたのです。
私は黒い雨を浴びながら、ムラに帰ってきたのです。

A【狗吉】柔らかかったお前の肌はどうした。これが、これが…
これは呪いじゃ。誰じゃ狗子を呪うたんは。
こいつが一体、何をしたというんじゃ。
こいつはこれまで一度たりとも、肉を食ろうておらんぞ。
経を書きうつし仏を彫り、殺生もしておらんぞ。

B【狗子】兄さん。穢れぬままに生きておっても、
穢れる時はこのように、穢れるのですよ。

A【狗吉】穢れじゃと？　狗子、これはお前の穢れではない。
お前は清く美しく、現世の全てを鏡のように写しだす。
人間の穢れが、この世に生きるすべての人間の穢れが、
お前の体に現れたのじゃ。

DEFG【村人】狗吉。生きて帰って来たか。

A【狗吉】なんじゃ、文句でもあるんか。

ＤＥＦＧ【村人】狗吉。我らとともにヤマに入ろう。
神の声が聞こえる巫女の狗子を使い、
日不見姫神の様子を探るのじゃ。

Ａ【狗吉】…神を…追い出すというんか。

ＤＥＦＧ【村人】時代は変わったのじゃ。
いまは洋の東西いずれからも、神様をお呼びできる。
何を信じるも自由なのじゃ。
ヤマの神は所詮ヤマのことしか守れぬ。
国が負けては意味が無い。
弱き神などいらん。
もっと強い神様に我が身を守っていただきたい…

Ａ　【狗吉】阿呆か、お前ら…。
生まれ育ったヤマの神すら守れぬ者を、
どこの神様が誰が守ってくれるんじゃ。

やがて一同は、「大穴」にたどり着く。

Ｂ【狗子】ここです。この大穴に、いつも真徳丸様といるのです。

Ａ【狗吉】…狗子。どうじゃ。

Ｂ【狗子】日不見姫神。日不見姫神…。
聞こえません。何も聞こえません。

ＤＧＦＧ【村人】日不見姫神とてヤマの恵を受けるものじゃ。
黒い雨でヤマが傷ついた今、神の力も弱まったのじゃ。
死んだんじゃ。ヤマの神は死んだんじゃ。
突き落とせーっ。

「村人」たち、「狗吉」と「狗子」に襲いかかり、
二人を「大穴」に突き落とす。

ＤＥＦＧ【村人】神なき今、
キノコの穢れを受けている狗子など居ぬ子。
要らぬ子よ。

動かなくなってしまった二人。
そこに「人之子」がやってくる。

Ｃ【人之子】母さん。おじさん。大丈夫ですかぁ。
駄目だ…深い。深すぎる…。
どうして私は犬なんだ。人間の体さえあれば、
すぐに母さんを引き上げられるのに…。
私は、すぐにヤマを駆けずり回った。
兎やトカゲや川魚を捕まえて、大穴に落とした。
母さん、食べてください。

生き物を放り込んで行く「人之子」。

Ａ【狗吉】狗子…あの犬が…取ってきてくれたぞ…食うんじゃ。
Ｂ【狗子】私は穢れてはいけない。
そう教えてくれたのは兄さんでしょう。
獣の肉を食べるわけにはまいりません。
Ｃ【人之子】母さん、食べてくださーい。
Ａ【狗吉】これは…手の無いモグラ…？
Ｂ【狗子】まさか、日不見姫神…。
あなた…モグラに戻ったのね。手も指も爪もないけれど。
ようやく自分の本来の命として、
生きる決心、死ぬ決心がついたのね。
真徳丸様に、感謝しなくては…。

C【人之子】あぁ、もう獣がいない。
ヤマに食べられそうなものはない。
母さん…母さん…。
私を食べてください。わたしを母さんの命にしてください。

「人之子」、自らの身体を「大穴」に投じる。

B【狗子】人之子…どうしてそんな愚かなことを。
C【人之子】「命の理」に背き、「心の理」に従ったまでです。
B【狗吉】私は、獣の肉を食べるわけにはまいりません。

A【狗吉】どうしたらええんじゃ…。
B【狗子】なにもしなくていいのです。
同じところから生まれてきた私達。最後は同じ穴の中。
ヤマに命をお返ししましょう。
A【狗吉】ヤマに返してどうするんじゃ。もうヤマに神はおらんぞ。
この国にはもう、ヤマにもカワにも、どこにも神はおらん。
この国は、この国の人間は、
神や仏よりもあのキノコを畏れておるのじゃ。
B【狗子】これも御仏のお導き。
私には極楽浄土が待っております。でしょう？
A【狗吉】お前をこんな場所に導くような仏が用意した、
極楽浄土なぞ信用できるか。
B【狗子】では、どうするのです。今わの際に私達、
一体何に祈るのです。
A【狗吉】狗子…神になろう。
B【狗子】神に…？
A【狗吉】俺達自身が神となるのじゃ。
B【狗子】私たち自身が、神に…？
A【狗吉】かつてイザナギとイザナミが、体を重ねこの国を、

生みたもうたように俺たちも、俺たちもまた神となり、
新しい国を生むんじゃ。
俺たちの国は俺たちが生み出すんじゃ。
狗子。神になろう。新たな国を生んでくれ。

B【狗子】兄は私の手をとった。
俺の手は穢れとる。触っちゃいかんと罵った、
その手で私の手をとった。
キノコの力で焼けただれ、黒ずみ歪んだ私の肌を
兄の穢れた手が撫でる。
獣を殺して私を育て、神を殺して戦へ向かい、
人を殺して生き延びた兄の手。
そうか、兄は私を抱く為に、キノコに穢れた私を抱く為に
生きて帰って来たのだと、あぁこれは邪念。
ノミがあれば仏を彫り、筆があれば経を写し、
この邪念を断ち切ることができただろうに。
いや…私はずっと、兄を救いたかったのだ。
穢れた私はようやく今、兄を抱えることができる。

A【狗吉】狗子。お前の体はどうなっている。

B【狗吉】私の体は大きくなっておりますが、ひとつだけ、
大きくなっていないところがあります。

A【狗吉】俺の体も、大きくなっておるが、ひとつだけ、
大きくなり過ぎたところがある。
俺の大きくなり過ぎたところと、
お前の大きくなっていないところ、そのふたつをつなぎ、
この国を生もうではないか。

B【狗子】子を残したいという「命の理」ではない。

A【狗吉】お前を愛しいと思う「心の理」でもない。
なんの理でもないのじゃ。願いじゃ。
俺たちの命が求める、願いじゃ。
狗子、神になろう。新たな国を産もう。

B【狗子】兄に抱かれる私は神じゃ。業に穢れたこの兄と

キノコに穢れたこの私。私たちは、新たに、この国を産む。

「狗吉」と「狗子」の激しい舞。
その傍らで「真徳丸」は語り出す。

G【真徳丸】私は私の命を燃やしている。
私は何の為に舞っているのか。
これは何を讃える舞いなのか。
今の命を激しく生きる二人の命を讃えているのか。
やがてこの世にやってくる新たな命を讃えるのか
あるいはその両方か。私は、ただ、「命」を踊り続ける。

「真徳丸」は演者「G」に戻り、なお語り続ける。

G さて、何を語って終わりとするのか。
そんなことは問題ではない。問題は、
何から語り始めるかだ。

私がいつまで私であるのか。
そんなことは問題ではない。問題は、
私は、いつから、私であったのか。

ことの終わりは、すなわち始まり。
すべてのことは、始まる為にのみ終えられる。

私は、私である前は、何をしていたのか。
しかしそんなことは問題ではない。問題は
問題は…
私は、私でなくなった後に、何をしているのか、だ。

鳴り止む音楽。客席を静観する演者たち。
場内アナウンスの声が聞こえる。

アナウンス　これをもちまして、シュウエンでございます。

客席を静観し続ける演者たち。

アナウンス　どなた様もお忘れ物のなきよう、お気をつけて
オカエリくださいませ。

演者たち、ゆっくりと舞台を下り始める。

アナウンス　本日はご来場、まことにありがとうございました。

すべての演者が、姿を消す。

了

※　上演を希望する際は、有料・無料に関わらず、
必ず劇団までご連絡いただき、戯曲使用の許諾をお受けください。